

博士論文（人文科学，2008年3月）要旨

災害絵図の表現と特質—天明浅間山噴火災害絵図の事例から—  
The representations and characteristics of the disaster maps of the 1783 eruption  
of Asama Volcano

大浦 瑞代 OURA Mizuyo

目次

第1章 序論

1. 研究目的

(1) 問題の所在

(2) 災害絵図の位置づけ

2. 研究方法

(1) 地図と絵図の記号論

(2) 葛川絵図研究会による絵図読解の方法

(3) 絵図研究が対象とする世界

第2章 浅間山噴火災害と絵図

1. 活火山浅間山

(1) 繰り返される噴火

(2) 火山の神聖視

2. 天明三年の噴火

(1) 噴火の推移と火砕物の噴出

(2) 泥流の発生と流下

(3) 被害

①降下火砕物による被害

②泥流による被害

3. 噴火災害への対応

(1) 噴火に対して

①鎮静祈願

②災い除け

(2) 被害に対して

①近隣の篤志家による救済

②江戸幕府による見分と普請

4. 天明浅間山噴火災害絵図

(1) 絵図目録の作成

(2) 先行研究

(3) 内容と視座の特徴

第3章 形態の工夫

1. かぶせ絵図と起こし立て絵図

2. 時間の経過を表す

(1) 噴火の推移

(2) 被害の前後

①降下火砕物による被害

②泥流による被害

3. 空間の奥行きを表す

(1) 平面による重なる表現

(2) 立体による位置関係の表現

4. 主題の効果的な表現

第4章 災害情報の伝播

1. 写しグループの存在

(1) 「信濃国浅間山大焼絵図」と8枚組絵図

①形態からみる絵図の前後関係

②表現の同異

(2) 「浅間山焼図」グループ

①形態と場面

②表現の同異

(3) 「浅間山大変日記」グループ

①形態と場面

②表現の同異

(4) 写しの系統

2. 写しに伴う表現の改変

(1) 位置の異なる被害村名

(2) 燃える山々

3. 災害情報の記載

(1) 選択される災害情報

(2) 混在する災害情報

4. 間接伝聞による表現

#### 第5章 絵図に基づく被害の復原

1. 中之条町を中心とした災害絵図の読解

(1) 被害状況

(2) 「中之条町浅間荒被害絵図(一)」

(3) 「中之条町浅間荒被害絵図(二)」

2. 岩井村の災害絵図の読解

(1) 被害状況

(2) 絵図の提出

(3) 「浅間焼け吾妻川沿い岩井村泥押し被害図」

(4) 「浅間焼け吾妻川沿い岩井村畑泥押し図」

3. 絵図の現地比定と泥流範囲復原

(1) 中之条町周辺の現地比定

(2) 岩井村内の現地比定

(3) 復原図から判明する泥流の流下特性

4. 直接体験による表現

#### 第6章 結論

1. 天明浅間山噴火災害絵図の特質

2. 災害実態の解明に益する災害絵図

3. 課題と展望

謝辞

文献

要旨

図表

資料編「絵図目録」

#### 要旨

本論文の目的は、読解に基づいた災害絵図研究の意義を示すことにある。描かれた災害の様相には作製者の意識的・無意識的な選択があるため、作製者の関心の在り処や主題を読解しなければならない。それゆえ記号論的手法を用いて絵図の表現と特質を明らかにし、考察をおこなった。

対象としたのは天明浅間山噴火災害絵図であ

る。絵図は文字だけでは伝達しにくい相対的位置関係を表し得るが、これまでの歴史災害研究では、文字で記された史料が主に扱われてきた。数少ない災害絵図の先行研究では、精度の高い情報を伝えとみなされた、幕府や藩が作製に関わる公式な図が重視された。しかし、権威づけられた図が一律に正確な情報を記しているとは限らず、実体験に基づいて私的に作製されたもののほうが詳細な情報を記していることもある。そこで、個人の立場で作製されたものが多いと位置づけられてきた天明浅間山噴火災害絵図を対象とし、作製の公私に関わらず、絵図そのものを検討した。

研究目的と研究方法を第1章で記した。絵図における記号論は、図像群の範列および統辞法と捉えられる。図像の種類とその精粗・大小・色調等の差異は範列であり、図像の配置を決定づける構図は統辞法である。図像と構図はそれぞれの図で個別のかつ完結的で、描かれる範囲は作製者の関心の範囲である。そのため1点ごとに表現を分析し、主題を読解する必要がある。

第2章では事例を扱う前提として、活火山浅間山の天明噴火の推移、もたらされた被害の概略、そして人々の災害対応について述べた。絵図の作製は、一種の災害対応とみなせる。

噴火は天明三(1783)年四月に始まり、当初は断続的であったが次第に激しさを増し、七月に大規模噴火を起こした。大量に噴出した火砕物は中山道を一時不通とし、偏西風によって東北にまで降下した。山腹には火砕流や溶岩流が流下し、北麓では大規模な土砂流動が発生した。土砂は吾妻川へ流入して泥流となり、川沿いの集落や田畑を押し流し利根川流域にも被害をもたらした。犠牲者は、泥流による流死者だけで1500人近くに達している。

この災害に関わる絵図の体系的調査はおこなわれたことがなく、全貌は明らかでなかった。そのため個人で可能な限りの調査をおこなった。まず天明浅間山噴火災害関連の資料集、被害の大き

かった群馬県や長野県を中心とした県市町村の史誌、博物館や文書館の展示図録や蔵書目録等に目を通し、関係ありそうな絵図や古記録を拾い上げた。次に、所蔵先が明らかなものについては先方へ赴いて現物を確認し、法量の計測や彩色の確認、文字の判読等をおこなった。そして許可された時のみ、持参したデジタルカメラで現物を撮影した。所蔵機関や教育委員会等が指定する手続きによって、現物の写真を得た場合もある。現物にあたれずカラーコピーの入手も難しい時は、概略だけでも把握するためにモノクロコピーを得られるよう努めた。調査を進めるなかで、現在は所在不明であることが判明するものもあったが、それについては参考とした文献の執筆当時は存在していたとみなした。

調査は一枚物の仕立てが施された手描きの絵図に限らず、古記録の挿図や摺物等も対象とした。1つの記録の中に内容が異なる複数の挿図がある場合、それぞれを1点として扱った。その結果、250点以上存在することが判明した。それら1点1点について画像と共に書誌情報や摘要等をまとめた絵図目録を、資料編として本論文に付した。この目録は、天明浅間山噴火災害絵図に関する初のデータベースとしての価値を有している。250点以上の絵図のうち、付随する文書や記録等があるものはごくわずかで、ほとんどが製作者や製時期・製目的等が不明である。それゆえ記号論的手法が、読解の有効な手立てとなった。

描かれる内容は噴火と被害の様子が主であり、被害に関しては、降下火砕物による被害と土砂流動に端を発する泥石流被害に分けられる。ただし、1点の絵図に1つの内容だけを描くものは少なく、精粗の差はあれ複数の現象をまとめて描くものが多い。災害発生源である浅間山は狭範囲図を除くほとんどの絵図に描かれ、視座は内容と大きく関わっている。

噴火の様子は、浅間山の南側の視座から描かれるものが多い。これは、見通しの良い南麓では噴

火を実際に眺められたことが影響していると考えられる。特徴的な構図として、画面中央部に浅間山山頂を配置し、そこから噴き出す煙の図像に注意が向くようにしたものが挙げられる。降下火砕物による被害を描くものは、ほとんどが南側か東側の視座を取る。中山道の軽井沢宿と沓掛宿の被害を図像化し、彩色や注記によって噴火の推移や堆積した灰の量を示す絵図が多い。泥石流被害は全体の4分の3以上の絵図に描かれており、大きな関心が寄せられたことが伺える。視座は北・東・南側と豊富で、描かれる範囲も吾妻川・利根川両流域に及ぶものから村限りのものまで広狭にわたる。点数の多さと関連して被害の表現もさまざまであり、通常の河川流路の両岸に泥石流範囲を彩色するものや、被害有無の境界線だけを引くもの、色の塗り分けで各町村の被害程度を表すもの、被害数値を注記するもの、等がある。

いろいろな表現があるなかで特に注目すべきは、形態に工夫を凝らした絵図の存在である。その特質を第3章で、具体的な絵図を挙げて詳述した。天明浅間山噴火災害絵図には、かぶせ絵図や起こし立て絵図の形態を用いたものが25点ある。かぶせ絵図とは、本紙と異なる図像を描いた紙を部分的に貼り重ね、それをめくることで複数の様相が1点の絵図内に表現される形態を指す。起こし立て絵図も部分的に紙を貼り付けるが、図像の形に切り抜かれた紙の下部のみを貼り、図像を直立させられるようにした形態である。かぶせ絵図での表現が平面に留まる一方、起こし立て絵図では立体の表現も可能である。このような形態をとる絵図の報告例はあまり多くないが、災害絵図にはある程度の事例がみられる。それは災害が、時間的にも空間的にもある程度の広がりを持つからである。天明浅間山噴火災害絵図においても形態の工夫によって、時々で異なる噴火の様子や被害前後の対比、山の位置関係が表される。限られた料紙内で主題を強調するために、考案された表現なのである。

絵図中の情報に着目すると、図像や構図のほか注記の文言等に共通性があるものを複数見出せる。これは写しによると考えられるため、第4章では原図が同じと推定できる絵図のグループについて検討した。写しの存在から、間接的な伝聞情報によっても絵図が作製されたことがわかる。写しの過程で情報はさまざまに取捨選択されるため、同じグループ内でも表現の異なるものがある。そのなかで特に差異が顕著な図像は、作製者の関心を反映した意図的な改変と捉えられる。ただし写しが重ねられるに従い、原図とは異なる位置に被害村名が記されたり、浅間山以外の山も噴火したように描かれたりする事例も見受けられる。写しによって、情報が錯綜することもあり得たのである。

それゆえ、絵図から被害の実態を解明するには、直接体験に基づいて描かれたものを用いるべきである。現地を熟知した人物が作製に関わった狭範囲図であれば、具体的な地物が図像化され、微地形も詳細に表され得る。そのため第5章では、吾妻川を挟んで対岸に位置する中之条町（現、群馬県吾妻郡中之条町大字中之条町地区）と岩井村（同、東吾妻町大字岩井地区）の泥石流範囲を村限りで描いた事例を扱い、図像の現地比定をおこなった。この町村には構図や図像が異なりながらも、ほぼ同じ範囲の泥石流被害を示す絵図が2点ずつ現存する。直接の写し関係にない2点を相互比較し、共通点や相違点を明らかにすることで、それぞれの絵図に特徴的な表現を見出せる。

絵図の凡例には、道や川だけでなく泥石流範囲も示され、寺社は注記を付した個別的図像で表される。明示されたコードは主題と直接関わるとみなせるため、道・川・寺社の図像がパス・エッジ・ランドマークとなり、泥石流範囲を定位していると読解できる。これらの図像を壬申地券地引絵図や空中写真を用いて地形図と照らし合わせ、聞き取りや資料等を用いて現地比定をおこなうと、泥石流範囲の復原も可能になった。

その結果、吾妻川の湾曲部では右岸と左岸で泥流の達した高さに差があることがわかった。攻撃斜面側と滑走斜面側における泥流の高低差は、これまで指摘されていない。泥流の流下特性の解明に役立つ新たな知見を、絵図から導き得たのである。

以上の考察から、災害絵図の表現と特質が明らかになり、読解の重要性が証明された。情報伝達やイメージ形成、歴史災害の実態解明等、災害絵図はさまざまな分野に寄与し得る史料である。そのため今後も、読解に基づいた多角的な研究が必要である。

#### 初出誌一覧

- 大浦瑞代 2002. 『天明三年浅間山噴火災害絵図の分析』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文。
- 大浦瑞代 2006. 災害の記録と記憶. 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編『1783 天明浅間山噴火報告書』154-180 及び付録 CD.
- 大浦瑞代 2007. 災害絵図分析の視点—天明三年浅間山噴火災害絵図の読解から— (国史学会平成18年度2月例会発表要旨). 国史学 192: 126-127.
- 大浦瑞代 2008. 天明浅間山噴火災害絵図の読解による泥流の流下特性—中之条盆地における泥石流範囲復原から—. 歴史地理学 50(2): 1-21.

---

おおうら・みずよ

2002年4月お茶の水女子大学大学院人間文化研究科複合領域科学専攻入学